

論 叢

大化改新の研究(一)

津田左右吉

大化の改新といへば國史の上の常識であつて、それについては今さら事新しくいふべきことも無いやうであるが、しかし、よく考へて見ると、わからぬことはいくらもある。之に關する唯一の史料である書紀の記載が甚だ不完全であり、或は曖昧であつたり混亂してゐたりするので、事實の真相がつかみにくい。従つていろいろな臆測が加へ得られる。近ごろ往々見うける社會史的もしくは經濟史的の觀察にも、可なりにあぶなしい臆説があるやうに思はれるが、それは一つは、或る種の成心を以てそれに臨むからでもあると共に、また一つは、改新そのことにわからぬことが多いからでもある。大化の改新はもつと研究してみる必要があらう。

根本の問題は何を改新し如何に改新したかにあるが、何故にさういふ改新が要求せられたか、或は企てられたか、如何なる過程をふんで改新が行はれたか、改新を企て又は行つたものゝ意圖と其の實際の成果とは一致してゐるか、如何に唐制を學び如何にそれを變改したか、などの諸問題が、それに關聯して考へられねばならぬ。

さて、孝德紀を讀むと、所謂「改新之詔」が大化二年正月の條に載せてあるが、それには第一に皇族以下諸家の私有地民を廢することが述べてあり、それから、地方行政區劃を定め地方官などを置くこと、戶籍計帳を作り班田收授の法を定めること、租税及び賦役のことが次々にいつてある。さうして、同じ年の三月には子代入部御名入部と稱せられてゐる皇族及び諸家の特殊の私有民の獻上に關する皇太子の上奏があり、又た八月には品部、即ち上記の一般私有民、の廢罷について更に詔勅が發せられてゐる。既に正月の詔勅があるに拘はらず、同じことが種々の形で反覆せられたのは、諸家が其の領有してゐる地民を沒收せられることを欲せず、或は改新によつて從來の地位と生活とを失はんことを危虞したがためであらう。が、それにも拘はらず、新政府はどこまでも私有地民の廢罷を實行しようとして努力したことが、これらの上奏や詔勅によつて知られる。これで見ると、改新の主要目的は皇族及び貴族豪族の私有地民を廢して全國の土地人民を國家に統一することであつ

たことが知られるので、地方區劃や租税などの制度を定めることは、其の當然の歸結として、又たそれに附隨して、行はねばならぬことであつたと推測せられる。(班田の制は必然的に此の改新に伴はねばならぬことであつたかどうか、問題であるが、それは後に考へることとする。)正月の詔勅に地方區劃や地方官のことを述べてありながら中央政府については一言もして無いこと、八月の詔勅の終に所謂卿大夫臣連伴造等に對し「今以汝等使仕狀者、改去舊職、新設百官、及著位階、以官位叙、」と附言してあるのを見ると、當時まだ其の「百官」の官制ができてゐなかつたとしなければならぬこと、又た五年正月の記事に「詔博士高向玄理與釋僧旻、置八省百官、」とあつて、此の時はじめて中央政府の官制の立案が命ぜられたこと、などを考へると、上記の推測は一層たしかめられるので、改新の政は何よりも先づ土地人民の處置に向けられたことが知られよう。更に溯つていふと、元年八月に早く東國の國司が任命せられ、戶籍を作り田畝を校することが命ぜられてゐるが、これは新政の準備であるべきことをも、考へねばならぬ。二年三月の詔勅に、前に任命せられた東國國司の非違を指摘してあるのも、直接に民政に關することだからであつて、やはり、此の意味での新政に隨伴した用意である。要するに、改新の第一目的は諸家が世襲的に土地人民を領有してゐる點に於いての氏族制度の廢止であつたので、朝廷に於ける地位職掌の世襲的である點に於ての氏族制度の變革は少くとも第二次のことゝせられたらしい。

附記。こゝに引いた五年正月の記事は文辭が曖昧であるが、本文に述べた如く解する外はあまりない。孝德天皇の即位と同時に左右大臣及び内臣は任命せられたが、官府の組織はできてゐなかつたのである。孝德紀、齊明紀及び天智紀を通覽するに、地方官の官名は往々記されてゐるが、中央政府のは上記のもの、外にはそれが見えず、天智紀十年の條に至つて、始めて太政大臣、御史大夫の任命の記事が現はれ、大藏省大炊省といふ官府の名も見える。これは所謂近江令によつて官制が定められたからであらう。天武紀に見える官職の名もまた此の官制によつたものであることは、おのづから推測せられよう(なほ後文参照)。玄理と僧旻とに命ぜられた立案が果してできたのか、できたとすればそれがどうなつたのか、明かでないが、多分、此の二人によつて最初の案が立てられ、それから後、多年の潤色を経て、天智朝に至り一度び成案となつて決定せられたのであらう。さすれば、大化改新から天智朝に於ける此の令の制定までの間は、中央政府の事務は、時に臨んで便宜處理せられたので、日常の吏務に至つては、概ね改新前の状態が持續せられてゐたのではあるまいか。國家の大政は皇太子や内臣や左右大臣によつて決定せられ、改新に關する、或はそれに伴つて新しく生じた、事務については、文筆に長ずるもの、伴造のうちの才幹あるものなどが任用せられて、それに當つたのであらう。

地方官については、大化元年八月に「東國等國司」が任命せられてゐるが、二年三月には「東國々司等」に詔勅が下されて、其のうちに「前以良家大夫、使治東方八道、」といつてあり、同じ月に又た「東國朝集使」に對して詔勅を賜はつてゐる。こゝにいふ東國もしくは東方八道がどれだけの範圍であるかは問題であり、又た何故に東國のみに斯ういふ取扱がせられたかも明かでない。第一の問題については、天武紀五年四月の條に見える詔勅に東國を西國に對して用ゐてゐること、並に同紀元年の條に天武天皇が伊賀から伊勢の方に向はれたことを「入東國」と書いてゐることを、孝德紀二年の詔勅に見える畿内の區劃と對照して見ると、畿内を除いて其の東方を東國、西方を西國といふのかと考へられ、少くとも後の東海東山兩道の地方が東國といはれたのでは無いかとも思はれるが、天武紀五年四月の別の詔勅に、礪杵(後の土岐)郡にある紀阿佐麻呂の子を東國に遷して其の國の百姓とせよといふことを美濃の國司に命ぜられてゐるのを見ると、美濃は東國の範圍外にあるやうであつて、此の推測には合はぬ。しかし、東國を後の東海道方面のみのことと見れば、天武紀元年の記事と此の美濃國司に對する詔勅とは齟齬しないことになる。さうして、東方八道が東國と同意義であることは詔勅の内容によつて明かであるから、もし此の八道が八國の意味ならば、此の見解はそれによつて助けられるやうでもある。八國が何々であるかは不明ながら、東海道が八國であつたと考へることにはさしたる無理が無いが、東山道方面をも含んだ廣い地域としては、八の數が少な過ぎるからである。(古事記の崇神朝及び景行朝の物語

に東方十二道とあるのは東海道方面の八國に東山道方面の四國を加へたものであるかも知れぬ。「記紀の研究」に説いて置いた如く、此の二つの物語に用ゐられてゐる此の文字は、大化以後に書さかへられたものである。以上は孝徳紀の東國と天武紀のそれとを同じ意味のものとして考へたのであるが、此の考へかたには大過があるまいと思ふ。ところで、もしかう解することができらば、東海道方面のみが何故にかういふ特別の取扱をうけたかがわからず、上に記した第二の問題の意味が一層深くなる。もつとも、上に引いた如く、大化元年の記事には「東國等國司」とあつて、「東國」の下に「等」の一字が加へてあるので、それによると、此の場合のは「東國」以外の地方も含まれてゐるやうであるが、それに對應すべきは二年の記事には何れも東國とのみあること。又た元年の詔勅のうちに「國司等」といつてあるところがあり、二年三月の條にも「詔東國々司等」とあることから考へると、「等」の字は「國司」の下にあるべきものが錯置せられたのであらう。だから、これは論ずるに足らぬことである。二年の改新の詔勅の「其二」に「初修京師、置畿内國司郡司關塞斥候防人驛馬傳馬、」とあるから、一般に國司郡司を置かれたのは二年であるので、元年に國司の任命せられたのは東國に限られてゐたと考ふべきであらう。(單に文面から見ると、此の詔勅の國司郡司以下は畿内に限つたものとも解せられるやうであるが、此の時の詔勅の全體の精神から推測するとさうでは無く、文の意は、京師を修め畿内の制を定め又た全國

に國司郡司以下を置くといふのであらう。ただ、元年の詔勅の終に「其於倭國六縣、被遣者、宜造戶籍并校田畝、」とあるのは注意を要するので、此の使者の使命は「作戶籍及校田畝」とある東國國司のそれと同じであるから、東國の外に倭國がそれと同様に取扱はれたらしく見えるが、こゝに特に「使者」とあつて國司とは書いて無いことを考へると、當時倭國にはまだ國司が置いて無かつたらしい。(東國國司に對する詔勅のうちにかういふことの含まれてゐるのは奇異に感ぜられるが、これは東國國司に下されたものとは別に倭國についての詔勅があつたのを、書紀の編者が恣に此の二つをつなぎ合はせたからであらう。天武紀十年四月の條の「立禁式九十二條」についての詔を記したところに「辭具有詔書」といつてあるのを見ると、當時の詔勅を記録したものがあつたらしいが、孝徳朝についてもさういふものがあり、それが書紀の材料となつたのではあるまいか。書紀の編者は或はそれを漢文にかきかへ、場合によつてはそれに潤色をも加へたのであるから、かういふことがあつたとしても怪しむに足らぬ。それから、倭國の六縣について特にかういふことを行つた理由も、また明かでない。此の六縣は祈年祭の祝詞に見える高市、葛木などのそれであらうとは考へられるが、それが或る人々のいふが如く皇室の直轄地であつたかどうかは、疑問であるから、さういふところに此のこの理由を歸するの、早計である。又たよし直轄地であつたにしても、倭國に於ける直轄地が此の六縣のみであつたかどうかとも明かでない

から、なほさら、さう簡單には決められない。(新年祭祝詞には、六の縣に生ひ出づる甘菜辛菜を皇御孫の命の御膳に供するとあるが、吉野、宇陀などの水分の神について、それらの土地に産する米を御膳に供することが述べてあり、飛鳥、石村などの山口の神についても、それらの地方の山の木で皇居を造營するといつてあるから、六の縣のみが特殊の關係を皇室に有つてゐたとは見なし難いやうである。むしろ、皇居に近いところであるために、それらの地方の産物が御料に供せられたので、そこからかういふことがいはれたと見る方が妥當であらう。)しかし、それはともかくも、最初の國司の任命が東國に限られたことは明かであるが、其の理由は知り難いといふ外は無い。元年の國司の任命は改新の準備のためであつて、改新がそれと共に行はれたのでは無いし、全國に新施設をするに先だち一地方にまづそれを試るといふことも理解し得られるが、何故に東國を撰んだかがわからないのである。なほ附記すべきは、元年九月甲申にかけて「遣使者於諸國、錄民元數、」とあることである。これは東國及び倭六縣の戸籍を作らせたこと、聯絡があり、それを全國に擴充したことのやうに見えるが、其の筆致が異なつてゐること、此の記事に結びつけて記されてゐる詔勅が「上代史研究」に説いた如く、書紀の編者の造作したものらしいことから考へると、此の記事は疑はしいものではあるまいか。詔勅を記すについて「仍詔曰」といつてあるに拘はらず、其の内容は此の記事とは聯絡の無いものであるが、これもまた此の記事の全

體が胡亂なものであることを示してゐるのであらう。

更に一言する。改新の詔勅の「其一」の終に「處々田莊」とあるが、これは「子代之民」につけて書いてある「處々屯倉」に對應するものであつて、「昔在天皇等所立子代之民」(この下に「皇子等所有御名代之民」が脱ちてゐるらしく思はれる)については「屯倉」といひ、「臣連伴造國造村首所有部曲之民」については「田莊」といつたので、此の二つは同じ性質のものをいふのであらう。さうして、屯倉が子代及び名代の民を管理し租税を徴收處理するところであるならば、此の場合の田莊もまた諸家の領土に於けるさういふところをいふのであらう。或は子代名代の民及び「部曲之民」は人についていひ「屯倉」及び「田莊」は土地についていつたものとも解せられ、それでも支障は無いやうであるが、民といへば土地がそれに伴つてゐることは明かであると共に、皇族も諸家も其の所領の地民を管理する機關があつたはずであるから、余は寧ろ上記の解釋を取りたい。勿論、「田莊」といふのは、本來、土地を示す語であるらしく、白雉元年の條に「一寺田莊」とあるのも寺の所有地をいふのであらうが、ミヤケの語が屯倉の字で寫され、又たそれが土地を示すやうになつたと同じく、一つの語が種々の意味を有するやうになつたことを考へねばならぬ。しかし、それは何れにしても「田莊」といふものが諸家所有の「部曲之民」の外にあるもので無いことは、おのづから知られる。屯倉は普通に皇室直轄地を管理する官衙、従つて又た

直轄地そのもの、稱呼として考へられてゐるやうであり、それに誤は無いのであるが、子代名代の民に關しても此の稱呼が用ゐられたことは、三月の皇太子の上奏によつても知られるのであるから、此の場合には、上記の如く解するのが妥當であらう。皇室直轄地の廢罷のことはこゝに記して無いが、八月の詔勅にはそれが見えてゐる。こゝには皇族及び臣下の私有地民についてのみ記されたのであらう。「上代史研究」には此の詔勅の屯倉を皇室直轄地と解して置いたが、それは斯う訂正せらるべきである。

それから、二年三月の詔勅に「宜罷官司處々屯田及吉備島皇祖母處々貸稻、以其屯田、班賜群臣及伴造等」とあるが、此の意味がわからぬ。皇祖母云々は皇祖母の特殊の領地をいふものとして解せられるやうであるが、「官司處々屯田」は何をいふのであらうか。或は官司に屬する土地人民であつて、其の租税によつて官司の費用を辨ずるやうに規定せられてゐるものかとも想像せられるが、すべての官職が世襲であり、伴造の家々はそれ／＼地民を有つてゐた氏族制度の時代に於いて、さういふものがあつたことが解し難いと共に、諸家の私有地民が廢罷せられる場合にそれを群臣などに班賜するといふのは、一層奇怪である。班賜云々は或は新制度に於ける食封として賜はる料となつたといふ意かとも臆測せられるが、食封はさういふ土地を充てたに限らなかつたであらうし、又たさう見るにしても「官司處々屯田」がわからないのである。たゞ、二年の改

新の詔勅に於いて諸家の私有地民の廢罷が説かれてゐるに拘はらず、かういふものがそこに記して無いのを見ると、これはさして重要なものでは無かつたらしい。或は、此の記事には、書紀の編者が詔勅を潤色した場合に生じた何等かの混亂があるのかも知れぬ。

二

さて、改新の第一の目的が私有地民の廢罷であつたことは疑が無いとして、それは何を意味するのであるか。これが重要な問題である。然るに、このことを明かにするについては、皇族や貴族豪族の土地人民領有の状態、いひかへると領主と其の所領地民との關係、の如何なるものであつたかを知らねばならぬが、それが實はわかりかねるのである。領主は土地の所有者、即ち地主であるのか、政治的君主であつて土地は部下の農民の所有であるのか、前者ならば地主たる領主と耕作に従事する農民との關係は如何、後者ならば土地の所有者と耕作者との關係、また彼等のそれ／＼と領主との關係は如何。かうたづねて來ると、何れの問題にも明答は與へられないのである。が、このことはなほ後に考へるとして、しばらく別の方面から觀察するに、改新の詔勅に於いて此の私有地民の廢罷と共に地方區劃の設定が示されてゐること、二年八月の品部廢罷の詔勅に品部、即ち諸家の私有地民、が地理的に交錯してゐるのを不可とする意味が強く述べてあることを見ると、私有地民を廢して國家の民とするといふことは、民衆の所屬關係を改め、其の編成を新にしたまでのことであ

つて、民衆の身分、其の政治的社會的地位などに關する變事を意味するものでは無かつたことが推知せられる。即ち諸家の分領してゐた民衆を一樣に國家の領民としたまでのことである。民衆からいへば、彼等の領主が諸家から國家に變り、従つて、行政的には、從來の部が解體せられて地理的區劃による新編成に組み込まれたまでである。八月の詔勅に「始於今之御宇天皇及臣連等所有品部、宜悉皆罷爲國家民、」とあるのは、即ち之をいふのである。又た三月の皇太子の上奏に「兼併天下可使萬民、唯天皇耳、」であり諸家が私有民を使役するのは此の理に背くといふ理由で、私有地民を献上するといつてあるのも、從來の諸家の私有民と國家の民、いひかへると新しい意味での天皇の民、とが、彼等の身分、彼等と領主との關係に於いては、何等の變化が無いことを示すものであるといはねばならぬ。但し、八月の詔勅によつて明かに知られるが如く、これまでの意味での天皇の領民、即ち皇室直轄の民、は、皇族や貴族豪族の私有民と同じく、品部と稱せられるもの、即ち天皇の私有民、であつて、それは改新の政によつて一般の品部と共に一律に廢罷せられたのであり、そこに、すべてが新しい意味での天皇の民、即ち國家の民、として統一せられた意味があるのである。それと共に、改新前に於いては、皇室直轄領、即ち「みやけ」に屬する人民、所謂田部の民、も、皇族貴族や豪族の領有する部民も、其の性質に於いて何等の差異の無かつたことが、之によつて知られる。

改新以前に於いては、民衆のすべてが何人かの、即ち或は天皇の、或は皇族の、或は又た臣連伴造

國造、即ち貴族豪族、の私有民、即ち所謂品部の民、更にいひかへると部民、であつて、私有民ならざるものが無かつたのである。「上代史研究」に於いて、元年八月の詔勅に「國家所有公民、大小所領人衆、」と記してある其の前半は、すべての民衆が國家の民となつた後の思想で書かれたものであり書紀の編者の筆になつたものであると説いたことは、かう考へて來ると、一層たしかめられるであらう。後半は改新前の状態が寫されてゐるから、これは詔勅の原文の意味が失はれずに、文字のみが書き改められてゐるのであらう。以上の考察がもし誤まつてゐないならば、私有地民の廢罷は單なる政治的制度的變更であつて、社會組織の改革で無いことが、明かであるといはねばならぬ。民衆に於ては、上に述べた如く、領主が變つたのみであり、彼等の社會的地位が改められたのでは無い。貴族豪族に於いても、改新の詔勅の「其一」にある如く、舊來の私有地民の代りに食封が與へられることになり、又た上にも引いた二年八月の詔勅に見える如く、新官制による新官職に任ぜられることになつてゐるので、彼等の社會的地位に變りが無いのみならず、概していふと治者階級に屬するものとしての政治的地位にも、大なる動搖を生じなかつたのである。諸家の私有地民を廢罷するについては、其の代償として食封を與へることをいひ、所謂臣連伴造が舊來の地位を失ふ代りには、新制度による新官職に任用せらるべきことをいひ、詔勅の出づる毎にかゝる言のあるのは、彼等の生活と地位との安定を説いて、彼等に危虞の念を抱かせまいとする用意からであつたら

しいが、それは即ち制度の變革が、事實、全體としての彼等の地位と生活とを動かさないやうに仕ぐまれてゐたからである。又た、民衆は、改新前とても、領主の如何によつて身分に差異は無く、従つて又た彼等の間に階級の區別も無かつたのであるから、改新によつて身分に變化を生じ又たは階級が徹廢せられたといふやうなところのあるべきはずが無いことは、明かである。さうして、かう見て來ると、改新前の民衆の地位、彼等と領主との關係は、改新後の百姓、即ち後に公民と稱せられたものの、の狀態によつて推知せられるので、彼等は領主に租税を納め、又た種々の形に於いて領主に使役せられてゐたが、それは恰も改新後に於いて租調を徴せられ、又は使役せられ、或は其の代りとしての庸を納めたのと、大體に於いては差異が無かつたのである。いひかへると、天皇を始として皇族及び諸家の私有民であつた改新前の民衆の地位は、後の所謂公民と同じであつたのである。(班田の制によつて生じた差異のあることは勿論であるが、それは後にいはう。なほ、改新の前後を通じて奴婢の身分にあるものはあつたが、このことについても亦た後章に説くであらう。)

然らば、何故に此の如き制度の變革が行はれたであらうか。それは、舊來の制度の内部組織そのものが誘致した歴史的變化の必然的歸結として生起しなければならなかつたことであらうか、但しは特殊なる外部的事情がそれを要求したのであらうか。世襲的に何等かの政治的地位を有する貴族豪族が同じく世襲的に土地人民を領有してゐるといふ所謂氏族制度が、其の内部組織經濟組織の上

から維持せられないやうになつたといふやうな事實がもしあつたとするならば、それには、領主が其の地位と生活とを維持するに必要な収入を其の領民から得ることができないやうになつたとか又は何等かの理由から農民が領主の徵求に應じなくなつたとか、いふやうなことが考へられねばなるまいが、當時の經濟生活の狀態が明かにし難い以上、前者については確かな推測ができぬ。貴族社會が益々支那の文物を採入れ、佛教さへも彼等の間に漸く流行しはじめ、従つて彼等の生活の程度も高まり、寺院の建立などに費用をも要したので、それがために領民からの租税では彼等の生活を維持することが困難になつたといふやうなことが、想像せられるかも知れぬ。寺院の建立につれては、それに寄進すべき土地人民も無くてはなるまい。皇室に於いても、之と同様の理由で、其の直轄地からの収入だけでは漸次不足を生ずるやうになり、時と共に其の不足の程度が大きくなつて來たであらう。或はまた、文化の發達と政務の複雑化とに伴つて、朝廷に新しい任務が生じ、其の任務に當るべき新しい家々が起つたかとも思はれるが、もしさうならば、それに伴つてそれらの家々に給與すべき土地人民を要するやうになつたことも、考へ得られよう。土地の開墾などが種々の方面に於いて漸次行はれて來て、それによつて領地の増加した家もあらうし、又た一方では領民に賦役を課することが漸次苛酷となつて來たであらうが、それだけで斯ういふ新しい要求を充してゆくことはできなかつたであらう。さすれば、かういふところに氏族制度の維持し難くなつたこと

が示されてゐるかも知れぬ。しかし「上代史研究」に述べた如く、家々の間に勢力の争があつて、それによつて土地人民の領主が幾らかづつ常に變化し、特に皇室及び權力ある家々は地方の豪族を兼併することによつて其の領土が擴大せられたらしい形跡のあるのを見ると、かういふ自然の變動によつて上記の困難が或る程度に調節せられたことも、推測せられねばなるまい。要するに、領主と領民との所屬關係が固定してゐなかつたところに、氏族制度のなほ生命のあつた所以があるのである。だから、上記の如き狀態のあつたことは否み難いにしても、それが制度を破壊しなければならぬほどに差迫つてゐたかどうかは、疑問である。實をいふと、かゝる狀態は、隋との直接交通、佛教の流行などによつて其のころから特に強められ、或は其の進行が急になつたではあらうと思はれるが、其の時に始めて生じたことでは無く、よし其の動きは緩慢であつたにしても、古くから存在した傾向であつたはずであり、さうしてそれがまた同じやうな方法によつて、おのづから調節せられて來たのであらう。家々の地位や勢力、従つて又た其の領土、は決して固定してはゐなかつたと考へなければならぬからである。それから、改新以後に於いても、或は食封などの法制上の規定により、或は特殊の私的關係によつて、貴族の輩が土地と人民とを領有することは行はれてゐたのであり、年と共に權家の私有地民が増加し漸次改新の精神がくづれて來たことも周知の事實であるから、かういふ關係そのものが當時の生活に於いて不適合であつたとは思はれず、従つて又た農民

の領主に對する反抗といふやうなことがあつたとは想像せられない。だから、私有地民廢罷の理由を考へるに當つて、制度そのものの存立が困難になつたといふ點に重きを置くことは、正鵠に中つた觀察とは認め難からう。或は又た、蘇我氏や物部氏の如く多くの弱小家々を併吞して廣大な領土を有するやうになつたものが現はれて、土地民衆の集約的傾向がそこに生じ、それが又たおのづから土地民衆の統一に向つて道を開いたのであり、そこに權勢の争の當然誘致せられる氏族制度の自然の崩壊が見られる、といふことも考へ得られなくも無からうが、よしさういふ優勢な家が出たにしても、其の領土の全國の土地に對する割合は僅少であつたとしなければならず、多くの貴族豪族は依然として存在し、彼等は皆それ／＼の地位と領土とを有つてゐたので、上にも述べた如く、改新の詔勅に於いて彼等の危虞を除き其の地位と生活とを保證することに苦心したほどであるから、かゝる點をさまで重要視することはできないであらう。一二の權家が大なる領土を有するといふことは、むしろ其の領土が皇室直轄地を凌ぎ、従つてまた其の家の勢力が皇室を壓するやうになつたところに意義があるのであらう。

かう考へて來ると、改新の必要は、諸家が世襲的に土地人民を私有するといふ意味に於いての氏族制度そのものからいふと、寧ろ外部的な事情と目すべきところにあつたと見るのが、妥當であらう。即ち、特殊の事情としては、皇室を壓するほどな強大な勢力を有する蘇我氏の如きものゝ現は

れないやうにするために、諸家の勢力の経済的基礎としての地民私有の制を廢しようとし、一般的には、國家の權力を統一し且つそれを鞏固にするための経済的基礎として、全國の地民を國家に收めようとしたのであらう。當時に於いて最も切實に感ぜられたのは、對内的には諸家が地民を領有してゐるために皇室の權威が確立しないこと、對外的には半島に於ける大陸の勢力と抗争するために國家の統一が要求せられたことであつたらう。さうして他方には、遣唐使の見聞から得た、又た玄理僧旻等の供給した、知識によつて唐の制度が、模範とせらるべく、かがやかしい光を放つて識者の眼に映じてゐたのである。これらは殆ど從來の通説となつてゐることであるが、それは概して承認せらるべきものと考へられる。なほ、限りある皇室の直轄地を財政の基礎としたのでは、新しい時代の皇室としての地位を保ち政務を行ふには、其の費用が足りなくなつたであらう、と上に想像したことは、多分、事實であつたらうし、それは又た改新の企畫者によつて感知せられてもゐたであらうから、さういふことも改新の動機の一つとなつてゐたであらうか。しかし、これについて考ふべきは、蘇我氏覆滅の前からかういふ改新が企畫せられ、少くとも漠然たる形に於いて意圖せられ、てゐたので、従つて又た蘇我氏の討滅はさういふ意圖の下に行はれたのであるか、ただし蘇我氏覆滅の後に、それを機會として、此の企畫が生じたのであるか、といふことである。もし前者ならば、かういふことは蘇我氏全盛の時代には直接の問題としては生じなかつたものであら

う。其の時代に於いては、皇室は直接に政務の衝に當られなかつたからである。さて、書紀を見るに、皇極天皇四年六月戊申(十二日)に入鹿が殺され、翌日己酉(十三日)に蝦夷が誅せられ、さうして其の翌日庚戌(十四日)に孝徳天皇が即位せられたが、同じ日に皇太子の冊立、左右大臣及び内臣の任命があり、同時に僧旻と高向玄理とが國博士とせられた。これが事實であるとすれば、蘇我氏の討滅からすぐに新朝廷の成立となつたので、事件は極めて急速に進行したのである。が、こゝに注意すべきことがある。天皇の讓位と中大兄皇子中臣鎌子を中心とした新朝廷の樹立とは、かゝる際に生じがちな秩序の紊亂と人心の動搖とを防ぎ、蘇我氏の滅亡によつて崩壊した舊勢力に代る新しい權力の所在を明かにするために、急速に行はねばならなかつたことであらうが、左右大臣や内臣といふやうな新官職が置かれたのは、氏族制度變革の意圖が此の時既に明かに現はれてゐたことを示すものといはねばならぬ。新制度の立案者であつたと推測せられる僧旻と高向玄理とが、新朝廷の成立と同時に、いち早く博士とせられたといふのも、此の意味に於いてでなければ解し難いことである。もしさうならば、制度の改新は必しも蘇我氏覆滅の後になつて始めて企畫せられたとは見なし難いやうである。さう見るにはあまりにこれらのことが急速に運んでゐるからである。しかし書紀のこれらの記載が文字のまゝに信用せらるべきものであるかどうかは、問題であるので、それは中臣鎌子を内臣としたといふ記事に大錦冠を鎌子に授けたとあり、又た「増封若干戸」とあること

からも、考へられねばならぬ。大錦冠は書紀によれば大化三年に定められた冠の名であり、又た増封云々は封戸の制のまだ定まつてゐなかつたはずの此の時には決してあるべからざることであるから、これらは書紀の編者の造作したものに違ない。(白雉五年の條に紫冠を鎌足に授けられたことが見える。これは大化四年の改定の冠制によつたものとしなければならず、さうして其の制には錦冠の名は無くなつてゐるが、新制の紫冠以上は三年の制と同じであり、さうして三年の制に於ける錦冠は紫冠のすぐ下位にあるのであるから、鎌足が大錦冠の位を有つてゐたことはあつたかも知れぬ。さすれば、此の記事の冠のことは、何等かの記録に見えてゐたさういふことを材料として構想したものであるが、封戸のことは全くの捏造であらう。)辛亥(十五日)にかけて金策を左右大臣に賜ふとあるのも、事實かどうか、疑問である。この記事は、其の注に記されてゐて書紀の稿本と認められる「或本」に「賜鍊金」とあつたのを變改したものに違なく、従つて金策が机上の考案に成つたものであるばかりで無く、かういふ變改が加へ得られたことから見ると、稿本の記載もどこまで信じてよいか、考慮を要するからである。さすれば、上記の記事に對しても、亦た疑を容れ得るのであつて、此の點については「上代史研究」に述べた如く、孝德紀には、其の他にも造作せられた記事があることを參考すべきである。けれども、新朝廷の成立に關する書紀の記載を全然疑ふことはできないのであるから、よし其の任命の時日が精密に書紀の記載のやうでは無く、又た官名などは幾ら

かの後になつて定められたにしても、蘇我氏討滅の後、まもなく中大兄皇子と中臣鎌子とを中心とした新朝廷が成立し、阿部臣、蘇我山田臣が相並んで政務に當つたこと、僧旻高向玄理が顧問として支那の知識を供給したことは、事實であつたらう。従つて、制度改新の企畫に關する上記の推考は必しも甚しき見當違ひではあるまい。中大兄皇子や鎌子の如き有識者には、上に説いたやうな意味で制度の改新を要することが早くから感知せられてゐたであらうし、又た僧旻や玄理などによつて唐の制度に關する種々の知識が供給せられたのも、一朝一夕のことでは無かつたらうから、具體的の企畫こそは蘇我氏滅亡の後に立てられたであらうが、改新の意圖は其の前からあつたものと推測せられる。勿論、蘇我氏討滅の舉には、或は皇室の地位に關する危虞の念、或は蘇我氏の專權に對する反感、又た或は氏族間の鬭争的心理、もしくは其の他の種々の事情がはたらいてゐたに違なく、制度を改革するために必要な手段としてのみ行はれたのでは無いと見なければならぬが、これとそれらが複合して、あの如き蘇我氏誅滅の企圖となつて現はれたのであらう。さうして、それが一舉にして成功したのに勢を得て、急に新朝廷の威容を整へると共に、改新の實行に邁進する決意が生じ、具體的の計畫を立てるやうになつたのであらう。蘇我氏の滅亡から約一月半の後である八月庚子(五日)に東國の國司が任命せられて、改新の端緒が開かれ、翌年の正月、賀正の禮の畢ると共に改新の詔勅が發せられたのを見ても、新朝廷の成立後、直に改新の具體的方法が考究せら

れ、又たそれを實現すべき準備の進められたことがわかるので、之によつて見ても、新朝廷は其の成立の初から制度の改新を使命としてゐたことが知られ、従つてそれはまた上記の推測を助けるものであらう。かう考へて來ると、改新の理由として前に説いたところがあのづから證明せられると共に、直轄地の収入によつて皇室の地位を保つことが困難になつたといふやうなことは、よし、新朝廷の成立後になつて人の思慮に上つたにしても、根本の問題では無かつたことが知られるであらう。

ところで、かくして企畫せられた改新は如何に進行したであらうか。改新の實行は容易の業では無かつたのである。上にも述べた如く、朝廷に隸屬してゐる所謂臣連伴造の諸家は新政によつて其の地位を失ひ生活を失はんことを恐れてゐた。地方の國造なども同様で、二年三月の詔勅によると賄賂を新任の國司に贈つて舊來の地位に伴ふ利益を何ほどか維持しようとするものがあつたらしく想像せられる。伴造等には食封を與へ新官職に任じ新定の位階に叙することを約して彼等を安心させようとしたことは、既に説いたが、此の精神は後までも持續せられてゐる。かの皇太子の上奏に、御名入部子代入部を献上しながら、それに屬してゐた民の一定人員を舊主家の使役し得ることが記されてゐるのも、また此の政策の繼續せられたものと見なすべき民部家部の制が天智朝に定められたのも、同じ精神から出てゐよう。地方の國造などを郡司に任命し、それに伴ふ俸祿を與へること

にしたのも、亦たこゝに一つの理由があつたであらう。中央政府の組織すらも定まらない前に冠位の制を設けたのも、二年八月の詔勅を参照すると、やはり貴族等の地位を保證し彼等の名譽心を満足せしめようとするところに、一つの意味があつたかも知れぬ。が、改新に當つて斯ういふ用意が必要であり、詔勅に於いても反覆意を致してそれを言明しなければならなかつたほどならば、よし反對の態度となつては現はれないまでも、貴族や豪族の間、少くとも其の一部分、に於いては、漠然たる不平もしくは不安の情が無かつたとはいはれず、従つて改新そのことが何等かの支障にもあひ、又たそれがために當初の企畫が幾らかは變更せられたやうなことがあつたかも知れぬ。上に述べた皇太子の上奏に見える農民使役の規定の如きは、或は其の一例では無からうか。これは私有民廢罷の精神を損ふものだからである。況やまた、二年三月の詔勅の示す如く國司に非違の多かつたこと、さうしてそれは必しも國司に限つての話では無いと想像せられねばならぬことを考へると、此の點からも幾らかの新政の障害は生じたであらう。が、貴族等も力を以て新政に反抗することはしなかつた。彼等の領有する土地人民は各地方に散在してゐて、まとまつた力をなしてゐず、さうして彼等は遠方からそれを支配するのみであるから、それは領主たる彼等の經濟生活の基礎とはなつてゐなければ、封建諸侯に於けるが如くに、政治的もしくは軍事的勢力の根據とはならず、従つてかういふ勢力を背景として反抗の態度をとることはできなかつたであらう。地方の豪族はそれ

とは趣を異にするものであるが、これは土地も狭小で勢が微弱であつたから、反抗するほどの實力の無かつたことは、いふまでも無い。(土地人民の世襲的領有が行はれてゐても、それは建制度として見るべきものでは無かつたことを注意しなければならぬ。)だから、種々の困難があつても、それを排して改新を遂行することができたのである。さうして、それについては、新朝廷の成立後具體的の企畫を進める間に、おのづから新なる考案が漸次に加はつてゆき、或は又た勢の趨くところ必要の範圍を超えた施設を企てるやうにもなつたのではあるまいか。中央政府の組織や班田の制にはさういふところから出たものがあるやうに推測せられる。

三

改新の第一目的は皇室皇族及び諸家の私有地民の廢罷にあつたので、それを實行するに必要な地方官は初から任命せられたが、中央政府の組織を定めることは後まはしにせられたといふことは、上に述べた。政府の組織は、政權の歸するところを明かにし、其の運用の機關を設定することであるが、政權の歸するところは、事實に於いて、既に明かになつてゐるのであるから、それを運用すべき機關を設けることはさし迫つた急務といふほどでは無かつたこと、又た其の立案が容易で無かつたことも、之について考慮せらるべきであらうか。しかし、これまで朝廷のそれぞれの吏務を主宰して來た伴造は、皆な齊しく其の領民を失ふと共に、其のうちの或るものは新しく生じた事務の

ために地方官などの地位についたのであるから、上に述べたやうな、舊慣によつて目前の事務を處理する、便宜法をいつまでも維持するわけにはゆかず、又た政治が直接に皇室から出ることになり土地人民が國有となつたに伴つて、それに應ずる新しい機關を設ける必要は日々に加はつて來たであらう。のみならず、新しい官職が定まらなければ、全體から見ても舊來の貴族輩に地位とそれに伴ふ俸祿とを與へることができず、従つて彼等の生活を保證しようとする朝廷の方針を貫くことができない。又た根本的には、貴族等から土地人民の世襲的領有權を沒收したとすれば、さういふ經濟的基礎の上に立つてゐた官職の世襲制は當然破壊せらるべきものであるが、それに代るものは官僚政治制であるべきはずであり、土地人民が國家の手に統一せられたことは、自然に中央集權制を誘致するものであるから、さういふ精神の下に新しい官制が作られねばならぬことは明かであつた。其の上に、模範となすべき唐の官制が知られてゐたので、それを我が國に移植しようといふ意圖は、新朝廷の成立と共に、或は又た漠然ながら其の前から土地人民の統一の企畫せられたと共に、新朝廷の首腦となつた人々の胸裡に存在したはずであり、さうしてその希望は改新の進行と共に漸次強められて來たに違ない。其の上に、爲政者の地位に居るものの自然の欲望として、政府の規模を大にし又たそれに整然たる形態を與へ、さうしてそれによつて朝廷の尊嚴と政權の強大とを象徵させようとしたといふ事情もあつたであらう。僧旻と玄理とに新官制の立案が命ぜられたのは此の故

であるが、しかし、それが一應の成案となるまでには、少からざる年月を要したので、其の間、僧旻は歿したのであり、又た其の他の起草者にも變化があつたであらうが、ともかくも近江朝に至つて纔にそれができ上つた。此の官制の如何なるものであつたかは、勿論、明かで無いが、天智紀十年の條に見える太政大臣、御史大夫、法官大輔、學職頭、天武紀四年の條にある兵政官長、同大輔、六年の條の民部卿、などの官名、また天智紀十年の條に見える大藏省、大炊省、天武紀四年の大學寮、陰陽寮、外藥寮などの官府の名は、此の官制の規定によつたものであらう(大炊省の省の字には誤があるのでは無からう)。か此の名稱から臆測すると、一方では可なり唐風のところがあると共に、他方ではさうで無い點もあるやうであつて、御史大夫、兵政官長、法官大輔といふやうな官名は其の前者であり、太政大臣とか大藏省とかいふのは後者である。もつとも、兵政官長、法官大輔などといふのは民部卿といふやうなのとは不調和な名稱であり、又た學職頭は大學寮の長官かと思はれるに拘はらず、名稱が一致してゐないのを見ると、これらは公式の官名では無く、文筆に従事するものが唐めかして書いたものかとも思はれるが、御史大夫が太政大臣と併記してあり、又た次官の稱呼らしい大輔は唐名では無いのに、それが官長といふのと並記してあることを考へると、さう解釋するのも困難である。むしろ、名のつけかたの一樣で無く彼此混淆してゐるところに、此の官制の眞面目があり、それが即て當時の思想を現はしてゐるのでもあらうか。(ただ學職頭には疑

間があるが、これは後に述べよう。なほ御史大夫の下に「御史蓋今之大納言乎」とある注は、集解の説の如く、原注では無いに違なく、淳仁朝に大納言が御史大夫と改稱せられたことによつて漫に臆測したものである。)或は、最初の立案者の考と後の改訂者のとが並存し、又は種々の意見から生まれたものが強ひて結合せられてゐるのでもあらう。唐制を模範として新制度を立てようとするのが、根本の方針であるから、如何なる程度にそれを變改するかについて、種々の異なつた態度が取り得られるからである。(天武朝に至つて近江令を修正する必要が感ぜられ、それが持統朝に一旦成就しても、又た再び變改が加へられて大寶令となり、更に養老の改訂となつたのは、いろいろの理由からであつたらうが、少くとも其の一つとしては、こゝに述べたやうなことがあり、官制の點についても、それがあつたらうと推測せられる。)かう考へると、僧旻などの立案は、近江朝に決定せられたものよりも、もつと直譯的のものであつたと想像しても大過はあるまい。彼等が歸化人であり、我が國の實狀に通曉してゐなかつたと思はれることから、さう見られるのである。新朝廷成立の最初に左右大臣を置いたのみで大政を總理する長官を置かなかつたのも、唐制から來てゐるのではあるまいか。さうして、それにはやはり彼等の意見が參考せられたのではあるまいか。内臣といふのがあつて、それが後に内大臣となつたが、これは政務を總理する長官では無くして、むしろ最高顧問官のやうな地位であつたらしい。近江令に於いて新に太政大臣を設け大政を總理す

るものとしたのは、此の點に於いて唐制から離れたのであり、かゝる官職も其の名稱も支那には例の無いものである。帝王を輔佐する、もしくは政務を分掌する、官を置いても、一人にして大政を統率するものを設けなかつたのは、思想の上に於いて帝王の獨裁政治であるべき支那の政體から來てゐるのであらうと思はれ、最高の官としては三公九卿といひ又は六卿といひ三師といふやうなものゝことが昔から説かれてゐるのも、其の故であらうが、可なり久しい前からの慣例として天皇が親ら政治の衝に當られなかつたらしい我が國では、太政大臣の必要があつたであらう。中大兄皇子が、事實上、新朝廷の主宰者であつたに拘はらず、長い間、天皇の位に即かれなかつたことも、此の意味に於いて注意を要するので、大化から即位までの二十餘年間は、此の皇子は、いはば事實上の太政大臣であつたのである。太寶令には太政大臣を唐の三師三公に擬し、其の職掌を天子の師範となり陰陽を變理するものとし、闕の官としてあるが、これは近江令に於ける此の官の意義では無かつたので、大友皇子が任命せられたことから、それは明かである。持統朝に新令ができた時にも、高市皇子が太政大臣に任ぜられた。太政大臣の職掌に關する大寶令の文字は、新しく唐令から書き寫されたものであらう。令の官制では太政大臣が明かに置かれてゐながら、其の發布の後には令に見えぬ知太政官事の名を以て皇子が任ぜられることになつたのも、實際の地位が大臣の職掌に關する令の文字に適合しないからのことでは無かつたらうか。太政大臣を置く實際上の必要のあ

つたことは、これらの點からも推測せられるので、それは決して「無其人則闕」といふ、實務に關係の無い、ものでは無かつたのである。(太政大臣の職掌に關する大寶令の文字と其の思想との由來については、滿鮮地理歴史研究報告第十二所載「前漢の儒教と陰陽說」の第十二章及び注に説いて置いた。)これは一例であるが、近江令の官制に於いて、我が國の實際の狀態が斟酌せられたことは、これでも知られ、さうして此の點に於いて大化の初とは朝廷の態度に幾らかの變化のあつたことが想像せられるやうである。制度の根本的改革が始めて決意せられた時と、幾年かの實際上の經驗がつまれ、又た具體的に細目を規定しようとするやうになつた場合とでは、其の間に斯ういふことの起るのは當然である。もつとも、後になるほど日本化の傾向が強くなつたとのみはいひ難いので、他の一面に於いては支那文化に關する知識の深くなるにつれて、却つて唐制を學ばうといふ意向の加はつて來ることもあり得べきであり、上に述べた太政大臣の職掌に關する思想の變遷の如きは其の一例である。近江令に於いて種々の思想の傾向が混淆して現はれてゐたらしいのも、亦たこれの一理由があるかも知れぬ。なほ附言する。「上代史研究」に説いた如く、大寶令の官司には氏族制度時代の朝廷の官司、即ちトモの意味に於いての部、の繼續と見なすべきものが、少からず含まれてゐるので、其の官僚にも部の名を有する一階級があり、さうしてそれにはもとの部に屬してゐたものが多く任命せられてゐたらしいが、これは大寶令になつて始めて規定せられたものでは無いに

違ない。名稱からいつても、近江令の官制にあつたと見なすべき大藏省の如きは伴造の家の名となつてゐる大藏のそれを襲用したものであり、従つて之と同じ性質の名稱を有する大寶令の官司は、近江令に於いても存在したであらう。上に述べた如く、改新の初、中央政府の組織の定まらなかつた前には、便宜上、概して從來の慣例によつて事務が處理せられたとするならば、これは、それが制度として規定せられ令の官制の重要な組織分子となつたものであることを考へるがよい。制度は改められても、國民の生活状態は變化しないのであるから、それに應じなければならぬ日常の實務に關する官司については、かうするより外は無かつたのである。これは、租庸調に關する唐制が學ばれても、田租を稻で納めさせることが舊慣に従つたものであること、又は制度の上にも種々の方面に氏族制時代の風習が持續せられてゐること、同じである。しかし之と共に、一方では政府全體の組織について唐制が學ばれたことはいふまでも無いので、其の點に於いては、上に述べた如く最初の立案はよほど直譯的のものでは無かつたかと想像すべき理由がある。又た、新しい中央政府がまだ形づくられず、官制の立案すらもできなかつた大化三年に早く冠位の制を定め、翌年またそれを改定したのは、既に述べたやうに、貴族の階級的地位を保證し彼等の名譽心を満足させる必要のあつたことが一つの理由ではあつたらうが、それと共に朝廷の儀禮を整へ其の尊嚴を粉飾しようとする欲求からも來てゐるのであらうと思はれ、さうしてそれは治者階級には自然な要望で

あり、また其の模範が唐にあつたことを考へると、中央政府の新官制が、實際政治の必要からのみ立案せられたもので無かつたことが、この點からも類推せられるやうである。(未完)